

妊婦体験しながら世界一周の旅／箱山昂汰さん

平和という言葉は、どこかとりとめなくてちよつと苦手だ。その言葉を聞いて僕なりに思い浮かぶのは子供たちの顔だ。未来を創るのは子供たちであり、一人一人に無限の可能性があると信じている。そんな子供たちを支えていくことこそ、平和を創っていくことだと思っ。

少し前まで僕は、子供たちや彼らのお母さんたちの力になれたらと思っ、ちよつと特別な旅してきた。世界一周をしながら現地で出会う男性に妊婦体験をしてもらい、彼らに素敵なパパを目指してもらっ、という旅だ。

中学2年生の時、講演会で見た1枚の写真が最初のきっかけだったと思っ。7年半という時間をかけて自転車の世界一周した方の講演で、様々なエピソードを色とりどりの写真とともに知ることができた。その中に、アフリカの少年を写した写真があった。吸い込まれそうなくらい真っ青な空の前で、真っ黒な肌にキラキラした

目を輝かせ、真っ白な歯でニカツと笑っている姿だった。僕はその写真をときどき思い出しては、まだ見ぬ大きな世界を感じることができたし、そんな場所にいる自分を夢見ることができた。

高校3年生の時、進路を決めることになった。世界を股にかけて、目の前の誰かの力になれるような仕事をしたいと考える中で、医師という仕事こそピッタリなのではないかと考えた。当時の夢は「医師としてアフリカの国をまるまる一個分くらいハッピーにできるような仕事をするこ！」だった。

医学部に無事入学した後、何かしたくしょうがなかったので、国際医療に関する学生団体に参加した。その活動の中で、母子保健に興味を持つようになった。理由として、開発分野の中で特に困っそうだと感じたことと、僕を含めた三兄弟をシングルマザーで育て上げてくれた母の存在がある。貧しい国では、お母さんや生まれたてのベイビーがとりわけ困っているのかもしれない。それなら、そんな人たちの力になれたらと思っ。そして、そうすることは、ちよつと紆余曲折してはいけれど、しつかりと教育を授けてくれた母への恩返しにもなる気がした。

母子保健に興味を持つ一方で、中2の時からずつと懂れていた世界一周への気持ちも高まっっていく。国際医療をするくらいなら、とりあえず世界を自分の目で見た

方が良いだろう。そんな風に思って、世界一周の旅に出ることを決めた。バイトをしたり、休学の手続きを進めたりする中で、あつという間に月日は流れ去った。

出発3か月前になったある日、ふと、何か面白いことをしたいと思った。昨今の世の中、世界一周それ自体はそんなに珍しくもないことだ。自分にはかできないような、それでいて夢にも近付けるようなことはないか考えるようになった。母子保健と世界一周を掛け合わせて考える中で、妊婦体験ジャケットというものが思い浮かんだ。それは10キロの腹部に装着できる重りで、臨月の妊婦さんのお腹や胸の重さを疑似的に体験できるようにになっている。日本では病院や保健所の両親学級などの場で利用されている。それを着けて世界の街を練り歩き、現地の男性たちに妊婦さんの大変さを広めていく旅をするのなら、誰もやったことがないだろうし、ちょっとバカっぽいかもしれないけれど愛に溢れた旅になりそうだ。思い立ったら居ても立っても居られずすぐに企画書を書き始めた。この時から「お母さんに優しい世界を創る」ことが僕の旅のテーマの一つになった。

2015年2月19日、香港から旅が始まった。空港のゲートをくぐり、人混みの中にひとり立ち尽くしていると旅のスタートによる高揚感はいつきに萎んで不安な気持ちでいっぱいになった。泊まる場所も食べるものもこれからは自分で見つけて行かねばならない。それに加えて、妊婦体験を現地の男性にしてみたらやり方も。

後者に関しては、ネットで探しても答えが出てこない。旅を通して、試行錯誤の連続であった。

そもそも、訪問先どの国でも英語が通じたわけではない。そのため、変な格好をした不審者と思われるかもしれないし、悪くすると自爆テロを起こそうとしている犯人に間違えられかねない見た目だった。ひとまずは相手に活動の趣旨を理解してもらう必要があったので、実施する前の準備として英語の分かる現地の人に依頼して自己紹介と活動紹介を現地語に翻訳してもらった。他にも妊婦さんや子宮の中の赤ちゃんの絵を描いたりして、視覚的にもわかりやすくなるよう工夫した。

準備が全て整ったら、妊婦体験ジャケットを僕自身に装着して、各国の街を歩き回った。(ジャケットの中は10キロ分の水で、使わないときは水を抜いて軽くしていた。)時間のありそうな男性を見つけたら、元気良く現地の言葉で挨拶をする。その後、翻訳した紙を見せて妊婦体験してみないか提案した。だいたい男性が流るので、そこを愛嬌たっぷりでお願ひし続けてみる。そこでOKが出たら、手早く自分の着けていたジャケットを取って相手に着けてもらい、歩く、床にある小さいものを拾う、横になってもらうといった動作してもらった。こういった現地の妊婦さんたちが実際にしている動作してもらい、お腹に重りがあることでどういった大変さがあるのかの感想を聞いた。

体験が終わった後は、最後にまとめとして、「Please take care of your babies, your wife, and your mother. Respect women, and be a good father!!」(あなたの赤ちゃんや奥さん、お母さんを大切にしてください。女性を尊敬する心を持って、素敵なパパになってくださいね!)」と伝えた。この言葉を伝えるときに、僕は相手の目を真っ直ぐ見て、ありったけの心を込めるようにしていた。ときどき、目を潤ませてしっかりと見返してくれる人がいた。僕はそんな時に、ちょっと泣きそうになるくらい感動したし、活動を続けていて良かったと思うことができた。

最終的に、1年3か月をかけて43か国を巡り、1070人の方に妊婦体験してもらった。「妊婦体験をしてみませんか?」と声をかけて実際にやってくれる男性はおよそ3人に1人の割合で、断る理由としては、「時間が無い」「体の具合が悪い」「男のするようなことではない」といった声があった。しかし、実際の本音を察するに、「街中でそれを着けるのは恥ずかしい」「いきなり妊婦体験とか訳分からない」であったのではないかと考えている。一方で、妊婦体験してくれた人の反応は、最初は恥ずかしそうにしているけれど、一旦着け終ると笑顔を浮かべて写真を撮ったりしてはしゃいでいる人ばかりであった。和気あいあいとした雰囲気の中で、現地の人と関わりあうこと自体が僕にとってはとても嬉しい収穫であった。

イランのエスファハーンという街での活動がとりわけ印象に残っている。この街では人々のおもてなしをしようとする雰囲気は溢れていて、まるで天国みたいなところだと繰り返し思っていた。あるカッブルに声をかけて彼氏さんに着けてもらった際、それを見ていた彼女さんから「本当に素敵ね。こんな日本人の平和な考え方が私たちは大好きで仕方がないの!」と言われた。自分の故郷ごと褒めてもらえたのが嬉しく、この言葉が旅を通して一番心に残っている。イランに限らずイスラム教の国では、「妊婦さんやお母さんは一番に大事にするものだ」とコーランには書いてあるんだよ」と誇らしげに引用しては私の活動に対して暖かい言葉をかけてくれる人が多かった。一方で、帰国してからこの話を日本人にすると多くの人が意外だと言う。それがいつも、ちょっと悔しい。

アフリカは4か月かけて、エジプトから南アフリカまでを縦断した。旅を計画している段階では、将来の仕事現場を探そうと思っていたくらいであったけれど、実際に歩いてみると、問題意識のようなものはほとんど無くなっていた。「アフリカをハッピーにしたい」と夢見ていた高校生の頃は、知らず知らずのうちに「アフリカは困っていて救われるべき」という前提のもとでモノを考えていた。しかし、その場所に立って現地の人と同じように暮らす中で、そこにそのままある姿が良いと思った。日本の医療水準と比べたら確かに未熟であるのかもしれないけれど、僕

の想いありきでアフリカを変えようとするのは違うと思うようになった。それまでの固定観念も夢もぶち壊してもらえて、アフリカにはとても感謝している。そこにはやはり、中2の頃に憧れた写真みたいに真っ青な空が広がっていた。

世界一周のテーマである「お母さんに優しい世界を創る」ことに關しても、スタートした時とは違う考えを持てるようになった。僕はどこか無理をしても世界を良い方向に変えることを目指していた。しかしそもそも、圧倒的に大きな世界を、学生に過ぎないちっぽけな自分が変えようと頑張ったところで、目に見える成果が出るわけはなかった。変えなきゃと望めば望むほど、息苦しくてつらくなっただ。そんなある時、自分の好きなことは世界を変えることではなくて、世界を知ることなんだと気付いた。いろんな場所に行つて、いろんな文化のいろんな人に会うのが大好きだから、僕はずっと旅をしてこれたんだと気付いた。今は高校生の時のようにはっきりと自慢できる夢はないけれど、世界への熱い想いは増え続ける一方だ。医師という仕事をしているかは分からないけれど、これからも人生を旅するように楽しんで行きたい。その旅の中で、子供たちの未来を創る一助になればと思う。